岐蘇校友

明治四十四年二月二十四日印刷
明治四十四年二月二十七日發行
（定價三錢）
編纂兼發行人　長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地　安井正夫
印刷者　長野縣松本市本町百八拾四番地　兎澤忠雄
印刷所　仝縣仝市仝番地　交文社
發行所　長野縣立木曾山林學校友會雜誌部

生徒募集

一、來ル四月本校第一學年ニ入學スヘキ生徒約五十名ヲ募集ス

明治四十四年二月

長野縣立甲種木曾山林學校

●入學手續

本校ニ入學セントスル者ハ入學願書ニ履歴書及体格檢査書ヲ添ヘ來ル三月廿日迄ニ差出スベシ其樣式左ノ如シ

入學願書（用紙美濃紙）

御校ヘ入學志願ニ付御許可被成下度履歴書及身体檢査書相添此段願上候也

何府縣何郡市町村何番地居住
何府縣族稱誰子弟
入學志望者　何　某印

年　月　日

仝上　右父母後見人　何　某印

長野縣立甲種木曾山林學校長江畑猷之允殿

履歴書

本籍　何府縣何郡市町村番地族籍戸主又ハ誰子弟
寄留地　何府縣何郡市町村番地　何　某印
生年月日

學業

一何年何月ヨリ何學校ニ於テ何科何學年ノ教科ヲ修業若クハ卒業（證書ノ寫シヲ添フヘシ）

一何年何月ヨリ何年何月迄何處何某ニ就キ何學ヲ修業

賞罰

一何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞若クハ罰

右ノ通相違無之候也

年　月　日

身体檢査書

本籍　何府縣族籍
寄留地　何　某
生年月日

一、体格　常時充盈　空虛

一、身長　一、体量

一、胸圍

一、視力　一、痘

年　月　日　何病院長又ハ開業醫何某印

○入學者資格及試驗

第一學年ニ入學シ得ル資格左ノ通リ

一、年齡滿十四年以上ノ男子ニシテ高等小學校卒業若クハ中學第二學年以上修業又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者

二、身体健全ニシテ規定ノ學科ヲ修ムルニ耐ユル者

三、品行方正ニシテ林業ニ從事セントスル志望確實ナルモノ

四、在學中學資ヲ辨シ得ル者

右第一項末段同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲ除クノ外無試驗入學ヲ許可ス但シ入學志願者ガ應募人員ニ超過スル時ハ應募者今体ニ就テ試驗ヲ行フ其程度ハ高等小學校卒業ノ程度ニシテ國語算術地理日本歴史理科ニ就テ試ム尚願書差出期限三月廿日ニ尚在學中ニシテ三月末迄ニ卒業若クハ修業ノ見込アル者ハ其旨ヲ記載セル當該學校長ノ證明書ヲ願書ニ添付シテ差出スヘシ

○入學試驗場

選拔試驗ハ本縣管内各郡市役所ニ於テ又他府縣ヲ本校所在地在住ノモノハ本校ニ於テ執行ス前者ノ場合ニハ入學願書提出ノ際受驗地ヲ記シタル屆書ヲ入學願書ニ添付スヘシ

○試驗期日

試驗ハ四月六日午前九時ヨリ前記ノ學科ニ就キテ執行スレハ當日洋服若クハ袴着用筆硯鉛筆小刀用紙等携帶出頭スヘシ

○本誌目次

●學術。森林火災の防備、森林と國土保安との關係、一樹一木
●拔萃。森林年中行事、
●講壇。本多博士演説業の責務
●文苑。閑々錄、歸校の途次、涙の木、
●通信。學校近況、寄宿舍便、同窓會記事、下伊那郡上郷村共有林概況、

學術

森林火災の防備

伊藤譯

九月の亞米利加の一雜誌に載せるものなり著者は斯國農務局の技師ヘンリー、グレーブ緒言　林業成功を期するに就きて必要なる第一手段は森林火災の防備にあり火災に付きて大々的危嶮の存在する間は森林所有者は森林を合理保續的に作業するに至らざる可し

近時多くの地方に於て森林保護に付き長足の進歩を見るに至れり國有林並に公有林の大部分は森林防火の設備組織的になる各州にありては公の防火設備を以て私有地の上に組織的に防火を行はんとせり又或地方にありては個人の森林所有者防火に對する森林組合を組織し火災期間見廻り人として相

當數の番人を使用す中に付き最も成功せる森林組合はイダホートワシントンニ於ける或材木業者の組織になれるものなりされど我國森林の最大部分特に私有林に於て適當の防火設備なきは事實にして實に私有林の七十五%は防火設備零なり

森林火災の特性

森林火災は之を三種に分つを普通となす即ち左の如し

1、地表火災――乾燥せる木葉芥稿乾きたる草矮林並に小林木を燒き拂ふものなり

2、土地火災――其礦物質土壌は植物質材料の厚き蓄積を以て被はるゝところに起り其植物質材料の泥炭に似たる特性によりて地表火よりも著しく遲く延燒す

3、樹冠火災――林木の樹冠を燒き拂ふもの

地表火災

殆ど凡ての森林火災は地表火災にして地表の乾燥せる卷稿は一個の火の粉によりて点火せらる最初火は一小圓を畫きて燃え四周に延燒す

もしも風がある時は火は非常なる猛烈を以て風下に延燒し而して直に卵圓形を畫くもし其風が非常に强き時は火は風上の方面に於て全く消滅すされど其他の方面に於て烈しく延燒す即ち風と共に兩翼は斜に走り

火の前面は非常なる廣濶なるものとなる可し初め火の前面は中狹く不規則なる線の形をなす地形の不規則と不燃燒物質の分量の相違とは林地の或部分を急の部分よりも速かに燒くを以て大林の形は扇形にして前面は不規則の線狀をなす通常地表火は只だ土地に沿ふて燃燒す而して林木の頂上に達せすされど屢ば火焰は樹冠に達し而して彼等を燒くされど樹冠をつらぬき延燒するにあらざれば火災は尙ほ地表火の特性を保持す

燃燒する樣燃燒地積の形燃燒の速度並に火の密度は左の條件による

(1)不燃燒物質の特性並に分量

(2)地形

(3)土壤の特性

(4)大氣の狀態

不燃燒物質

地表火の猛烈は大に森林に於ける乾燥の物質の分量によるもし夫れ落葉多年積層して多量なればなるほど其燃燒益々猛烈なる可し落葉の分量は大なる樹冠を持つ樹種なれば最大なり例へば楓レエッドオークはアシユ又は樺よりも重く落葉を作る

ホアイトパインはピッチパインよりより重き落葉を作る

火の猛烈は更に木の葉の特性に屬す樹脂多き軟木の落葉は堅木の落葉層よりもより速力に且つより暖かなる火を以て燃ゆ

林地の乾燥木の分量は大に火の猛烈に影響す或種の森林にありては地上に散布せらるゝ落葉枯枝多量に達し火災危險の度高進す

こはロッキー山の松林に付きて例証す可し風下に當る地方には常に倒木の多量あり加ふるに舊式の伐木法によりて林地は梢葉られたる丸太によりて被はる此等は直乾燥し非常に燃燒易きに至る

更に敷葉破片の狀態が大に火の性質と烈度とを支配す

最强烈なる火災は礦物質土壤に達するまで燃料が乾燥せるところに起る燃料が一部分乾燥せるところにありては燃燒は遲くして敷葉は全然燃燒せず

敷葉は通常不同に散布されあるを以て地表火は甚だ不規則なり尙ほ他に地表火の不規則なる源因は地温の相違にあり

森林と國土保安との關係

西澤

吾人の地球を構成する岩石は其水成岩たるを問はず火成岩たるを論せず內部に在りては甚だ堅硬緻密なる成立を爲すと雖ども外面に表出せる部分は不斷空氣風雨寒暑に曝露せらるゝを以て時を經る久しきに彌るに從ひ風化して漸次軟弱輕鬆の性質に變化し殊に傾斜の急峻なる山岳にありては樹木地被等の之れを包被するに非ざれば自から保持すること能はずして自然剝脫崩壞して山嘯の因を爲し或は雨水と合して洪水の基を爲すに至るべし即ち平時雨量多き高山地方より集注する雨水は非常の動力を以て流下して禿露せる山腹に於て土砂を誘ひ奔流猖獗を逞ふして殆んど底止するとこなく其進むに從ひ土砂を伴ふこと益多きを以て平時に於ける河道を通する能はずして各處に氾濫し洪水を爲し田畠を荒し又人畜を害し其勢當る可からず或は又一旦其水量の減するの時あるも一度山岳より伴ひ來たりたる岩片土砂は再ひ反るに由なく其河底に堆積停滯するを以て河床は一雨の降る毎に高く延きて次期の洪水の誘因となる本邦各地方に於て是等の例證は尠からず彼關東平野に橫蛇せる荒川筋の河床の高昇するは其水源に當る秩父地方の山岳より流失せる土砂の堆積するに由るものにして偶々中仙道熊谷驛の附近にても其水源秩父山脈を構造する岩

石の斷片を認む又往時は堤防の上部に位せる人家も今日は既に迥かに其下方に在り堤防の高さは屋根より高きに至れりと云ふ是等は森林の取扱法至當ならす尙ほ一面に農業の進歩するに從ひて嶮峻なる山地の開拓行はれ一面に木材薪炭の需要多きに伴ふて運搬の便利なる地籍の森林は漸次濫伐せられたるの結果にあらざらんや此他各年夏期霖雨の候に至る時は諸縣に於て山岳の崩壞洪水の害等を聞かざるなく生民をして其堵に安んずるを得ざらしむもの幾何なるを知らず

又森林は廣茫たる平地若くは海岸に於て暴風の勢力を弱ふし且其盤結せる根株は土地を固定して濕氣を保持し土砂の飛散するを防禦するものなり即ち東海道沿岸に有する黑松林の防風防砂の効用を爲すが如き或は又關東の平野の如き平時風强く且輕鬆なる土壤の地にありては家屋の圍園は勿論田畠の附近に於て此等防風防砂の森林存在せさる時は到底充分の農作を爲すこと難し此等の性質を有する森林は只に其個人を利するのみならず其利害の關係は附近の地方まで影響を及ぼすものなり

此他又森林の存在は雪頽の害を防禦す即ち積雪地方に於て春季漸く積雪の融解するに際して其地面に接する部分は融水を通じて稍々速かに溶解するを以て數丈の高さに堆積する雪も其底部より自然に滑落を爲し其勢を防止する能はす爲めに岩骨を碎き樹木を挫折し道路を破壞し恐る可きの慘害を逞ふす恰も火山噴出の際融岩の奔生せる跡の如し然し是等は每に禿露せる山腹に起るものにして若し其地に森林の存立する時は之れによりて其雪害の未だ起らざるに防遏することを得べし

要するに森林と國土保安とは密接の關係を有し益々國家永遠の福利を增進するものなり反して森林の荒廢は水涸れ地瘠て田畑を耕すこと能はす土砂崩壞して河川を埋め風雨時を失ひ氣候和せず遂に人畜生を聊んせざるに至るべし且つ木材なければ家屋船舶及橋梁を造架する能はす又米を炊くに薪なく溫を取るに炭なきに非すや森林は天賦の一大財源にして國土を組織するの太本ならん(完)

一樹一木

小松吉次郎

公孫樹

公孫樹は支那日本に固有にして生長速かにして大樹となり長壽を保つこと松に劣らす其多枝にして何れも北に梢の靡けるは奇とす恰も數日用ゐたる箒等を立てたるか如く他樹と全く枝の趣を異にす行き暮れて方角などの知らざる地に入りても此一樹だに見なば忽ち東西を辨し得べければ磁針樹の別名あり宜なりと云つべし又此樹は現今普通神社佛閣の境內に聳ゆること多ければ吾人野外散策の折柄遙かに此梢を望まば三重五重の朱欄の塔に見ずとも佛光の輝く靈地たるを覺ゆされば實にや此樹は廢寺の卒塔婆ともなりぬべし秋ふけて肌寒き風に吹かれたる落葉の趣は何にものか及ふべき葉の黃みたる濃からず淡からず珍らしくも其形の扇なす葉の塵一つも止めずと掃き清められたる廣き庭に一つ二つ散りたる風情は彼の利休が掃痕拭へるか如き庭中に樹木を殊更に搖かしたる比なるべし落葉の美につけて一層麗はしきは野寺の鐘ゆるく渡りて鳥も時に靜る頃墨を渡したる眞の暗夜に況して竹籔の茂れる邊に此樹の聳え立ちて其蔭に落葉の藏へるあたりなるべし恰も尙日光の殘れるかと疑はるゝまで明るく黃み渡りたる樣は實に美はしき限りなるべし

灰色の粗皮二抱へ三抱へも生長したる此木の材は平滑にして光澤あれば好て碁盤となす碁磐となりては數寄たる座敷の眞中に据へられ時知らぬ老人閑人に玩はれ屢々玉露の香氣に觸れて世外隱遁の身となり朝夕翫に愛せられ又緻密なる材は算盤球に作られて日常人々の指頭に日夜使役せられ身も瘠せ衰へて自由を欲くに至るまで數十年幾億万の數を示すべし或は俎に用ひられては無器用なる下女言葉荒々しき長家の主婦等の無慘なる小刀の攻めを受けて身は一分刻みに刻まれても忍耐强き俎はよく永年此苦役を忍ひて中央は凹になりて小娘が俎のいがみ根性をつぶやくに至れば再び裏返して用ゐられ一代二代の主婦の名の改るまで用立つこと頼母しけれ

終りに名木の保存に就きて文明の發達は物質的に傾きて僅かの利益の爲めにあたら天然物を破壞して顧ざるものあり東京にて有名なる赤羽の大銀杏は江戸名所圖繪にありて誰知らぬものなき名木にて小山町一番地內に夏は翠蓋天を摩して淸陰十畝に影し車夫も休めは馬も息を吐き往來の助けとなること大方ならず幹は四抱高さは七丈に餘りね此木不幸にて東鐵會社に市區取擴めの爲に土地買取せられ無慘々々伐て材木にされんとするも可惜ことなれば地主は事情を述べて移轉料を會社に請求するに會社は少しも同情せすとは何たることゝ抑も小山町一番地一帶の地は天正十八年八月一日家康の江戸入りをなせる間もなく筑前秋月の城主黑田甲斐守へ與へたるものにて當時邸宅を新築するに當り鬼門に當るとて豊

川稻荷を勸請し同時に此樹を植えたるものなれば三百の星霜を經過せる老樹なり實に此木こそ惜むべき哉、こは僅に一例なれど我國至る所に名木ありて巨大の枝幹を形つくり壯觀を極むるもの少からず欅、櫻、銀杏、松、杉等を多とす是等の立派なる標本は學術上永く保ちて參考に供し度は勿論又土地との歴史的關係よりも大切なるものにて其木の初めて發生して今日に至るまで其地に起りし出來事殊に著名なる事實等も少からざれば此等の名木に對して吾人は其地の歴史を連想して無限の感を催すべし又老樹大木は土地の風景を好くすることは前述の如く自然を美化して内外人の歎賞措く能はざるもの少からず若しかゝる貴重なる名木を一朝伐り倒し又傷けられて永く失ふに至らは實に惜みても餘りありと云ふべし近時土地開發盛に行はれて大都は勿論山間の地までも開墾せらるゝに至りては千年の齢を保ちたる名木も彼の赤羽の銀杏と運命を同うするものあるを悲むものなり

欅

我國至る所に堂塔の高壯なるもの少からずされば大柱大梁の珍らしくもなけれども吉野の「山鄙蹋」の柱北山の「南天床柱」などは稀有の逸品なるべし珍奇を好愛するは骨董道樂にして吾人は極めて普通なる有勝ものを愛すと其ありふれたる大柱の多くは欅なり大佛殿本願寺智恩院の棄日を驚す物皆此類なり神殿の垂木柱椽板及社前の鳥居も亦これなりされば此木は神佛を護るものなれば至る所に神靈の加護によりてよく生長し偉大なる幹枝は中天に聳へ數百の稚樹を瞰下す殊に此木は我國固有にして他國に類なき名木なれば樵夫杣人の尊敬も厚く又の欅は山靈の宿るものとして神酒を獻ずと云ふ此木冬枯すれども粗皮の灰褐色にて鱗片狀の剝脱あれば數多雜木の中に交りてよく區別すべく其新芽を出すに當りて青きと赤きとあり青きを青欅と云ひて其材宜しからず生長も劣れり赤きを赤欅とて材の美なると生長の速かなるとは皆人の知る所なり東京附近には家屋の周圍に多く植えられたるは此木の深根性と幹の強固とはよく暴風を防げば其百年二百年の高齢を保ちたるものは材色益美となり往々木理班紋を呈するの木理に目玉、笹目、鶉目等ありて何れも高尚なる風致を備ふかゝる良材は多く指物材彫刻材となりて貴重せらる箱火鉢となり黒柿の縁に配合せられ柔き灰は佐倉炭の菊紋を一層明かにし鐵瓦の沸騰する音あたり靜かなる座敷に据へられ麻布巾にかけられ愈々光澤を美にすべし或は箱根細工の手箱模形に造られては避暑の衆客に羨まれ愛嬢の土産に買ひ取られ數々楓の掌に上るべし或は欄間に違棚に書院に用ひられて裝飾とし云へば必ず此木を煩はすごろ目出度けれ嘗ては鳩鴿の巣かけし退ましき枝は金波銀波の遠淺の海に植ゑられて海苔粗朶となり鹹き水に潜りて香氣高き淺草海苔を集め朝飯の御膳の一隅を飾る助をなすさはあれ此木の美につけて大書すべきは若葉の麗はしきにあり秋の紅葉も此若芽に及ぶまじ又見所なき草屋も脊戸に此木の一本たにあらば畫ともなりぬへし落葉の散り行く樣に別けて秋の寂寞を覺わしむ空高く澄みきりたる三日月の影明く輝ける夕などは如何に云ひてか此木の美を稱へん哉

三月 拔萃

内業

一、鍬、四つ鍬、熊手、竹さなへ、鎌、水桶張り繩、土節と、もつこ、荷棒、唐鍬なた、稈包を取揃へ置くべし

二、貯藏の種子を取出し播種の準備をなす

三、推芽春子を容るべき紙袋及其外裝用の莚叉は箱を調製す

苗圃

一、上旬より播種を始む即ち大粒の種子及種實堅く發芽の遲きものを先にし松、杉、扁柏等の如き細粒のものを後にす何れも發芽後に於て降霜なき頃を見計ひ着手す

二、床換を行ふ即ち落葉松並に松類特に落葉松を先にし杉扁柏類之に次き冨樣潤葉樹を後にす概して本月中旬以降を最好季節とす

三、樹液の運動を始むる前苗木輸送を終るべし

四、接木の好季節なり就中彼岸後を最良とす樹種により入梅中を可とするものあり

五、挿木を始む即ち上旬には落葉、濶葉樹、下旬には針葉樹とす千葉縣山武郡に於ては本月下旬より四月中旬迄に杉の挿木を行ふ又飫肥地方に於て杉の挿穂は春分を好季とし其前後各十五日間位は之に適するものとし親樹の己に新芽を發せんとする際若くは斷芽の米粒大に發生したる時其穂を採り挿くるを良とせり

六、親木の根際より生じたる蘖條を根分ちす

林造

一、植付の好季節斷植補植共に鋭意之を行ふ樹種の順序は床換に同じ元來植樹

は土地の凍結融解すれば直ち施行して差支なきも就中季節は樹液の將に運動を始め發芽せんとするの時期にして一般に本月中旬後彼岸の候を最良とす

二、岐阜地方に於ては正南竹は本月中に黒竹は本月中旬より四月上旬に於て移植す

三、枝下を續行して可なり樹液の運動を始むる前に終るを要す

護保

一、寒國地方は本月下旬より四月に亘り雪解の爲往々谷川氾濫するを以て林道橋梁の保存に注意し且河川工事を中止すべし

二、苗圃に於ける晩霜の害並に森林に對する晩雪の害に注意すべし

三、積雪漸く融解す野火に注意す

四、松毛虫落葉苔蘚中より出て樹幹に上り始むるか故に目通りの粗皮を剝き其面に糊餅又は「タール」の類を塗抹し置きて之を捕獲す

利用

一、樹液の運動前に矮林の伐採を終り萌芽を障害すべからず

二、吉野地方にては本月上旬より四月中旬迄杉の化粧垂木を伐採す蓋し剝皮並乾燥の便多く剝肩の色澤美麗なるを以てなり

三、紀伊國尾鷲地方にては彼岸後直に杉扁柏林の春伐を行ふ

四、同地方は春季伐採の杉の生葉を刻みて之を乾燥し水力製粉器にて搗き碎きて線香用の粉末を製す而して三四月の杉葉は脂氣強きを以て佳良なるも五月を過ぎては脂氣を減じ冬季のもの亦脂氣に乏しく共に劣等なり

五、秋田地方は本月下旬より木材の管流を始む故に堤矢來其他運材設備に注意し之れか補修をなすべし

六、日當り良き地に生し十五六年以上を經たる赤松若は黒松の樹幹に鑿又は山刀を以て地上一丈許りの部分中數ヶ所及樹皮を剝き置き樹脂を分泌せしめ十月頃に至り其凝結するを待て之を採集して松脂を精製すべし

拂國海岸松に行なふ採脂法は一月より三月上旬の間に樹幹地上凡一尺の所に於て巾三四寸長二尺位粗皮を削り三月上旬巾三寸長一寸深三寸の截面を作り爾後凡一週間毎に上方に向ひ截面を擴張し一年間四十回乃至四十五回反覆し秋末の候寒冷を催すに至りて中止し次年三月上旬に至り再び截面を上方に擴張し採脂するものにして其滲出する所の滲液は截口の下に陶器容器を懸垂して之を受け二三週間に一回つゝ集脂す而して此法は松樹を枯損せしむることなくして能く採脂するを得るなり

七、推茸春子の發生は地方により天候の模樣により異なるも凡本月上旬(彼岸)より五月上旬(八十八夜)迄を發生期となす黄イチゴの花盛りを最好季節となす然れども虎杖の發芽期及藤の花盛りに於て尚盛に發生す

八、前年發生したる杞柳骨の新條を刈取り直に水田又は小講へ假挿し置くべき時は新芽を生ずるに至るを以て其一寸許に延びたる頃晴天の日を撰み材心に疵の付かざる樣剝皮したる後日光に曝して乾し上ケ柳行李の材料となす

九、東京府下目黒近傍の江南竹林は筍掘採の爲本月下初より林内の落葉を掃除す

十、葉製樟腦の原料となすべき樟落葉の採収は本月中に之を行ふ

十一、製造に關する設備即ち貯水池の掘設木臼又は石臼及桶の調製並に作業小屋の建設又は修繕等をなす

雜

一、本月より四月に亘り春季洪水に際し其最高水位を測定し置くべし

四月

苗圃

一、播種の好季節なり即ち東京附近にては上旬より中旬迄を可とし、四國九州にては之れより約一ヶ月を早め東北地に於ては半ヶ月乃至一ヶ月を遲らしむべし

二、前月に引續き床換をなすべし但新芽及白根の伸び出てさる間に終了するを要す

三、播種床に於ける早播のものは下旬より既に發芽を始むるが故に被ひ蓆取除の時期を誤らさる樣注意を要す但し播種の際被ひ蓆を一二寸の長に刻みて撒布したる場合は之か取除を要せす

林造

一、前月に引續き林地植栽をなすべし但東京以南に於ては普通本月を以て終了するも「九州地方に於ては前月を以て終了することあり」植付を始むる所多し

二、岐阜地方に於て淡竹の移植をなす

保護

一、發芽は二ヶ年を要する樹種即ち櫟漆朝鮮松等の霜除に注意すべし

二、寒地に於ては尚晩霜及晩雪の注意を怠るべからす

三、新植地に於ける苗木の雪起しをなすべし

四、苗圃に於ける鼠並地鼠の害を防くへし特に播種床に於て一層の注意を要す

五、東北地方に於ては本月を以て消雪期に入り林野の地表乾燥甚だしく落葉枯草苔蘚等實に導火の好材料にして恐るへき火災は只此一期に在り故に原野に接續せし新植地の如きは特に注意を要

六、九州地方に於ては本月上旬より中國地方に於ては本月中旬より十一月中旬頃迄牛馬の放牧をなすを以て森林内殊に新植地に侵入せざる樣取締を嚴にすべし

七、本月より五月は亘り筍の發生期なるか故に生長の見込なきもの又は密生せるものを採収し且竊盜及野猪の被害なき樣保護を怠るべからず

八、松類及「ケヤキ」の播種床に對し雀「ホウジロ」「アヲジ」「カハラヒヾ」等の害に注意すべし

九、杉の黑天牛成虫となりて現出し杉樹に產卵するを以て之を驅除すべし

十、本月上旬より樟葉蝨の成虫盛に發生するを以て之を驅除すべし

十一、松の黃藥蜂本月下旬乃至上旬より現出して產卵引續き黑色なる幼虫群生して松葉を蝕害するが故に發見次第之を驅除すべし

十二、梅毛蟲の幼虫櫻梅白楊等に巢網を作り群棲するが故に其散せざるに先たち之を驅除すべし

利用

一、雪解の出水を利用して盛に木材の川狩を行ふべし秋田地方に於ては本月より木材の筏下けを行ふ

二、吉野地方に於ては本月を以て杉林春伐の好季となす蓋し剝皮容易剝膚鮮明にして心材の色澤秋伐のものに比し稍劣るのみなるを以てなり但杉皮は虫害に罹り易し

三、深山地方に於ては伐木を始むべし「吉野に於ては杉林間伐は多く春伐とす

四、掃除伐及間伐を始むべし

五、秋季に行ふべき主伐及間伐の實査をなすべし

六、上旬より單寧形層皮の採収に著手すべし其最好季節は樹液の流動を殆め樹皮の剝離容易なる時即ち新葉の將に發芽せんとする直前にして東京附近に於ては四月上旬なるも北方に至るに從ひ漸次遲れ其間凡り一箇月の差あるものとす彼の所謂武州八王子樺皮の產地たる神奈川縣津久井郡佐野川地方にては新芽の凡り一寸位延ひたるときを最良とせり而して剝皮期間は約三十日間を限りとす是れ梅雨となれば乾燥不充分にして品質を損するとと農家繁忙となり人夫を得難けれはなり尤も削り剝と稱するものは年内何れの時を問はず北海道にては剝皮期間短きを以て多くは削り剝を行ふ而して樺皮に次き染用並鞣皮用に供すべきものは化香樹皮黃蘗皮檜皮推皮楊梅皮胡桃皮等なりとす

七、暖地に在ては本月より竹の原料即ちモチノキの皮剝をなし之を水に漬し置き七月頃より竹の製造に著手し寒冷の候に至りて中止す「沖繩にては濕暖なる故年中其製造に從事する事を得」

八、中是より八月に亘りあべまきの表皮を剝して寒子を製造すべし

九、本月より五月に亘り主として苦竹類の筍より竹皮即ち簿を採集すべし但し枝皮は七月下旬を採集の好時期とす

十、シユロの皮は四月七月及十月に各一度づつ即ち年々三回都合十二枚を採収し得べし又四季に剝き得るの說あり元より地質と培養とに從て差別あるものなり

十一、野生の百合根を掘りて百合粉を製すべし

十二、本月より六月下旬まで蕨紛の春季製造をなすべし

十三、岩茸は深山の懸崖に簇生するものにして土佐地方に於ては本月より十月迄を其採収期とす

十四、蔬菜類即ち一般にワラビ、ゼンマイ、ウド、イタドリ、ミツバ、フキ、ワサビ、カタクリ、ダラメ等又東北地方に在りては特にウルイ、シドケ、ホンナ、アエ等の副產物採収を始め其好季節に及んで干蕨、干紫蕨、干獨活及干款冬等を製すべし

雜

一、本月十五日を以て狩獵の最終の期日とす

二、左に掲くる鳥類は本月十六日より十月十四日まで（北海道に於ては九月十四日まで）捕獲する事を禁せり

鴨、雁、鶉、松鶉、鳩（鴿を除く）、鵜、猛々鷲、小鷲、中鷲、大鷲、厂、鳶、秧鷄

三、鷹類は四五月の頃三四個の卵子を產す

四、鴫類は北地に於て本月頃八乃至十四個の卵子を產し廿六日間にて孵化す

五、鴫類は北地に於て四五月の頃四五個の卵子を產し十八日間にて孵化す

講壇

職業の貴賤

本多林學博士
吉田佐十郎
筆記者 木下俾藏

林學博士本多靜六氏去る十二月十五日學校視察の故を以て本校に歩を寄せらる時恰も試驗中にて各生徒寄宿にありて勉學に餘念なかりし先生には舍内一巡の上新築校舍敷地を視察せられ午後一時より講堂に於て右題に對する一場の演說ありたり其大要を記す、文責記者にあり

諸君、私は今回當地を通過するに際し當校に立ち寄り我國家の上より見て最も必要なる學問を研究せらるゝ諸君に見ゆるのは愉快且つ光榮とする處である、就ては此機會を利用して諸君に申上げたきことは數々ありますが、氣車の都合上其意を盡ないのは實に遺憾とする處である、偖て諸君の學びつゝある林學、從事さるゝ處の林業は他の學問、他の職業に比して國家生產上甚だ大切なるものである何となれば森林なるものは間接直接の効あることは茲に喋々する迄もない、が林業其ものゝ性質が他のものより立派なる點を述べようと思ふ

昔より職業に貴賤なしと云はれて居るが考へて見るに是れは賤業に從事せるものを慰むるの一の方便に過ぎない、夫れでは何にまり職業の貴賤の區別をなすか、と云ふに之れを横に考ふるに直接自分のためになる職業は賤しく社會國家のためになる職業は貴しとする殊に自分も利益を得、公衆の爲めにもなる職業は最も貴しとする、次に之を縱に考ふれば直ちに効果の顯はるゝ職業は賤しく、永年の後に効果を顯はす職業は貴い。此點からして諸君の研究せられつゝある處の林業は最も貴き職業である

茲に注意すべきは文明の事業の一とし世間に於て立派なる職業と考ふるものに甚だ賤しいものがある、又國家に於て利益ある職業と考ふるものに、も賤業がある、即ち國家の生命を害する職業、例へば石油業、鑛山業等である、何故に是れを賤しき職業と云ふか、補充を計らずして採取するを以て限りある財源は遂に缺乏し職を失ふに至る現に越後の石油は生產を減じつゝあるを見る、斯る職業は國家の上より見れば賤しむべきである、是れを一軒の家に假想せば先祖より傳はりたる財產を賣り拂ひ結搆なる家を新築する時は一見甚だ立派の樣に見ゆるが、心あるものは餘り感心せない、

斯樣に先祖より傳へられたる財產を消費する斗りで跡に殘すことに勉めなかつたならば一家の衰微は明である國家に於ても亦然りとす、かるが故に國家の上より見て財を產し且つ貯ふる處の事業を起さねばならない、故を以て現今米國等にては斯の有名なるルーズベルト氏などは盛に國富保存論を唱ふるに至つた

茲に林業は諸君の子孫の代に於て使用すべきもので現在の利益を得ることが出來ないで將來國家に寶を殘し且つ國家の生命を長く維持するものである、即ち一家に於ても田畑山林等を保存するものは賤しめられる是れ賞し之れに反するものは賤しめられる是れが林業の貴き所以である、國家を永久に維持せんには大に此等の發達を期せねばならぬ、斯かる貴き林業に從事せらるゝ諸君は國家のため充分なる覺悟を持たなくてはならぬ

然して木曾は一方より見れば元より山林の盛なる處である、今度私が見る處に依ると木曾は山林は盛んであるけれども所謂林業なるものがない、何とならは木曾は自然生の樹木を切り出して利用する斗りて之れに造林することに重きを置かない、夫れ故に眞の林業と云ふことが出來ぬ、此点よりして木曾に林業なしと云ふのである、現在我國に於て眞の林業を經營しつつある處は微々たるもので僅かに長野地方に之れを見る、……林業とは其土地をして適當なる樹木を植栽し生產物を有利に使用するものを云ふのである木曾の樣に自然に放棄しては到底永年の利益を望むことが出來ないである

から木曾に於ても自然に放棄せず土地風土に應じて最も主要なる樹種を植栽し且つ之れを充分保護監督して始めて完全の林業と云ふ事を得る

木曾の林業の合理的に行はれざるは林學を學びたるもの少なきに依るが、然して農の如きは一度失敗するも年々之れを研究し充分なる効果を收むることを得るも、獨り林業は事業永年に亘るを以て一度の失敗を償ふにも數十年を要する、夫れ故に經驗を以て實を擧ぐることは困難である　故に林學を修めたるものを必要とするのである、我國は最も其人に乏し昨れ偏に諸君の力を俟たなければならぬ、宜しく自重自愛せられて研究せられんことを

林業を重ぜよ

三年　倉澤

近來世人が林業を重じ漸く之が經營施設に力むる傾向あるは聊か心を强ふするに足るものの如しと雖此傾向は永久的なるを要し此熱情たるや一時的に終らず且失敗なからん事を切望せずんばあらず

森林は國土保安上よりも人類棲息上より云ふも治水上よりも又個人的生產上より云ふも共に國家富源にして如何に重大なる關係を有し居るやは今更多言を要せざる所なり

然るに我國森林は何故に今日の如く荒廢し禿山裸地多きが其原因種々ありと雖も林制弛廢濫伐の弊害等は其重なるものにして要するに當時森林智識の幼稚なりし爲重ずべき事を重せざるの一語に歸せざる可からず

抑林業は百年の大計にして是が經營は堅忍不拔の精神と千古不易の熱情とに俟たざる可らず若し夫れ設計其實を失せず經營其道を誤らず保續主義を以て保護を切にして管理監督宜しきを得ば禿山赤裸の地一變して一に愛林の思想も振興し森林制度も良好に行はれ衰頹極まれる慘狀も挽回され文明的の事業と共に驟進し國家富源も開發せられ

商人の驅利も增進するに至らん

文苑

閑々錄

竹軒

○愚兄小松君前號より「樹一木の美を載せらる先づ科學的方面より仔細に觀察し來つて終に其自然の美觀に及ぶ情景竝び到り讀む者をして坐ろに魂飛び神逝くの思あらしむ乃ち筆を呼して閑々錄を記し聊か小松君の後塵を趨ひ併せて前號鳴肋片々の記に繼がんとす

○謠曲に曰く「あひに相老の松こう芽出度がりけれ」と我國に於て松より芽出度もの多からず漢土亦之を貴ぶ字說に松は木の長猶公の如し故に公に從ふとあり、論語には松柏後凋と云ひ秦の始皇は雨を松下に避けて封じて大夫と爲したりと傳ふ

○十八公は松の異名也松字を分てば十八公となるに由る吳の丁固は松腹上に生ずと夢み後十八年遂に公となる

○日本武尊東征より還りまして美濃を經て伊勢に入り尾津の前なる一松の下を過り給ふや先に聖餐を召す時遺れ給ひし御劍尙失せずして枝に懸れり尊喜びて歌ひ給はく

尾張に、たゞに向へる、尾津の前なる、
一つ松、吾背を、一つ松、人にありせば
太刀はけましを、衣きせましを、一つ松
あせを

と尊意蓋し此松にして若し人間ならば太刀も與へて佩かすべし衣裳も授けんとなり優にやさしき御心ならずや誰か武尊を只猛しとのみ言ふや

○吳の季札其友徐君の生前の寶劍を容れて其墓に劍を解きて懸けたる逸話は傳へて千載の美談となす大江匡房曾て安樂寺に曲水の宴を張り自ら之が席を作る其中に曰く

堯女廟荒春竹濺三一掬之淚。松悪。三尺劍。徐君墓古秋。

と秋松の字は上句春竹の對語として用ゐしもの季札が果じて松に懸けたりや否やは必しも問はず但し松は墓木として尤もふさはしく又清節凛として此說話に一段の光彩を添ふるを覺ゆ

○謠曲に高砂住吉の松等が人格化されたるは前號に云へり其本は古今集序に「高砂尾上の松も相たひのやうに覺え」など云へるより起りし事なるべし謠曲松風亦人格化せらる羽衣の曲は天女三保松原に降りて羽衣諸躍東遊の舞曲を奏す蓋芙蓉千秋の岳雪一碧鏡を開く田子の浦波に映ずる所端麗壯重正に是れ天下の偉觀なり況んや三保の松原の更に風趣を饒からしむるをや天人も亦羨みて降り來るや宜也

○常陸國に童女松原あり風土記に稱す香島郡童女松原昔神の童男童女あり嫗歌の會偶遐逅して互に慇懃を通じ松下に憩ふ時に玉兎皎々松風颯々四顧寂寥たり二神語りて盡きず夜の闌なるを知らず俄にして鷄鳴を聞き天明け日出づ二神爲す所を知らず人の見るを愧ぢ乃ち化して松樹と成る郎子を奈美松といひ孃子を古津松といふと童女松原の名は直に何等かの傳說を想像せしむ果然一箇の神話也

○松を待つに言ひかくるは歌謠の慣用手段也百人首に「まつとし聞かば」と歌ひ山上憶良は唐にありて故國を慕ひ

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の濱松

まちこひぬらむ

と歌ふ百人首の歌は無理にコヂ付たる拙歌なり憶良の歌の自然なるに若かず御津の濱は即ち難波江也往昔松原ありしなるべし

○古は正月子の日野邊に出で小松を曳きて千代を祝ふ之を子の日の遊といふ我國固有の習俗にして專ら上流社會の戲に屬す霞棚引く春の野清華の公子雲上の麗姫三々伍々小松原に逍遙す眞に一幅の畫圖也

○村上の御時入道式部卿親王子の日の御遊あり大中臣賴宣歌を上りて曰く

千年まで限れる松も今日よりは君にひかれて萬代やへん

と自ら上乘となし父賴基に示す賴基沈吟之を暫くして側なる枕を取て能宣を打ちて曰く汝他日昇殿をも許され主上の御子の日に侍する事あらば如何なる歌を以てか祝ひ奉らんとするぞと蓋主上の爲めに此傑作を發せざりしを惜みし也

○松籟など字面を見るだに心地よし壯烈の響は龍吟鼓聲にも喩へ美妙の音は琴の音に擬せらる仲國が小督局を尋ねわびて「峯の嵐か松風か尋ぬる人の琴の音か」と思ひまどへる一句人の琴線を動かす齋宮入御の御歌に曰く

琴の音に峯の松風通ふらくいづれの緒よりしらべ初めけん

と之れ松風入琴を詠ぜし也鼎鐺煮沸の音を松風に譬ふるは反對なれど面白し

○陶弘景特に松風を愛し庭院皆松をうゑ每に其響をきゝ欣然として自ら樂み獨其下に遊ぶ人以て仙となすといふ凡そ人の心耳を清ましむるもの一にして足らずと雖松風の如きは其充なり而も眞趣を解するものは稀也弘景の如き眞に松風の一知己と謂つべし

歸校の途次

一年　久保田蛙水

文章上達は練習にあり何でも作り見るが良し斯く思ひて吾が日記の一節歸校の途次を記す

樂しかりし正月も半過ぎ冬期休業も終らんとする十七日の朝家人に見送られて下伊那の郷を出發す家人の前はいういうと出掛けたれど今暫し家にごろつき居たくも思はれぬ昨日友と落合すべく約せし追分宿に至りて待つこと一時間、馬車來りぬ飛び出で見れば友には有らず今暫くと復た腰かけて待つ中早や晝とはなりぬ飯認めて後待つこと一時なれど來らず或は太平超えを爲したるにもあらんかと思ひて終に獨りしほしほと出掛けたり後に聞く友は或事情の爲大平超えを爲したりと、旅は道伴れ世は情ほんに獨り旅は詰らぬもの也片桐宿より馬車に乘る寒風吹き込みて辰色なし、がたがた馬車の乘り心地いと惡しく同乘のオンバネスの紳士も丸髷も絆天男も斯く云ふコクラコートの學生も無言にて俯くのみ此伊那の平野に於ける交通の不便さはさても癪に觸はる話なりワット氏の恩惠瀛車の便に浴する能はず亦電車の飯田迄通ずるは未だ程遠し下伊那交通委員の骨折りし輕便鐵道も繰に調査費を豫算に計上したるのみにて物に成らうにもあらず國產輸出の大立物の原料蠶繭の地なる伊那平野の交通は憐なるかな昔より山路山國の形容詞たりし木曾の谷にも瀛車が飛ぶに去りとは不公平なりなど馬車の不快さから地方的根性の下らぬ事を思ひ廻らす中何時か日は暮れ身は赤穗宿の逆旅の一室にありあひ宿も無く話相手も無ければ晩餐匆々蓐に就く翌朝馬車屋來りて出ると云ふ乘りて松嶋に向ふ、途中に七人目を詰め込まれ大に閉口す制限外の客を乘すると云ふ場合にあらずと默して小さくなる松島より南一哩間は電車軌道敷設中なり松嶋より電車に乘ればさすがに乘心地良く睡を催す頃辰野に着す時に午後一時なり四十分發の瀛車に乘らんとせしに下り延着にて二時四十分迄待たねばならずさても待ことに緣のあるかな上り上諏訪行來る、二青年あり切符を買ひて飛び出だすこの時遲く彼の時早く瀛車一聲勇しく發車す二人は惘然として佇み見送るのみ次の上りは五時過なりと同病相憐む瀛車待ちのつらさ、可笑しくも亦氣の毒なりき、二時四十分發塩尻に乘り替へ木曾路に入る、塩尻附近一圓の渺茫たる桔梗ケ原は天文二十二年深志城主小笠原長時の武田信玄と鬪ひて大敗せし古戰場なり風に吹かるゝ松が枝にも何となく當時の名殘を止むる樣に思はる此處を過ぐれば走るに連れて彌々狹き谷に入る昔より遠近人の汗を流して越ゆたる鳥居峠も今は夢の間に過ぐ、隧道通過の際試に時晨を見れば正に五分時を費せり以て其長距離なるを知るべし日暮れて宮の越驛に着下車し折節の寒風に暗に包まれて福嶋迄行くの元氣無く終に此處に宿ることとし旅宿に著きて晩餐を呼べば名物の子鳥來りて膳に上る、翌朝此處を發して福嶋町に入り無事歸校せり寄宿舍は相變らず賑かなりいざや心の手綱引き締めて學びの庭に數草摘まん哉。

涙の木

細江岫雪生

一年

彼れは病める父のやつれ果てたる顏鈍き官能の中にも、彼れの行末を思ひ給ふを見て今更ながら放蕩した身の口惜しく、火の消え細りたる火鉢の灰をかきならし〳〵薄暗き、ランプの下に、看護するなりき父はやがて重き枕を起して、健三ー、と骨ある聲にて呼びぬ、ハイと答へて、近寄れば父は落ち凹みたる目を開き、肉落ち節のみ見ゆる細き腕を頰杖に『私の小さいときには、庄屋の息子若樣で面白く育つたものだ、ろれも夢あーあれ前もだい分失敗したのーヲーヲー咽喉が渴いた健三、水を一杯たくれウーウー』父は老の身に泣きつ勵ましつ、常暗に白う閃く星の夜に果てたまいしもいまはた昔となすぎぬ

裏山は人手に渡すなと遺し〻父の言の葉に彼れは幾多の困難に打ち克ちて、千町歩は手ばなさず、父の死したる年より十町歩づゝ、植樹すべく定めぬ

★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★

松ー杉ー金柘ー丈餘にのびたる中に鍬持ちて閊伐しつゝある彼れは改めて年輪を數えはじめぬ、一、二、三……二〇うず〳〵と慄へる肉は兩の眼より凄々と涙を送り悲しみ慘む如きー風の聲ー雲の色は彼の心をうゝりぬ、されど彼れの涙の目には喜びの父の面が見られてー彼れは大なる慰安を得ぬ——父死して二十年——と口に唱え胸に泣きぬ

まぼろしの面は時となく、日となく彼れの頭に浮びてー遂に人の羨し自ら樂しむ清福なる家庭を結ばしめぬ、嗟々ー、血あり骨ある、涙の木——。

★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★

和歌

春の歌の中に

安井　正夫

うぐひすのなきていてくるたにのとを
ふりうづめたるはるのあわゆき

雪

かすみうめたるはるのやまさと

春

ふくしまのふりしせきちのあととへば
ここよとここにうくひすのなく

關路鶯

木曾橋居　育蛇生

木曾の山々の寺なる片隅に
閑中の閑我は占めにき
小夜更けていよ〳〵しらべの音高し
箟のつゝみ松風の琴
春秋と木々に千草にうつろひて
たゆるひまなき庭もせの花
音といふ音はひりみて天地に
たのがいきのみさゆる眞夜中
看經も香のけふりもほろけれと
ひろきみてらにみちぐわたれる
ほのくらきうすひやゝかな堂の奥に
阿彌陀のまなこひかりかがやく

歌帖より　幽美

雲雀鳴く野の若草にまろびゐて
淡き匂をかぐ〻悲しき
春のひる草にまろびてゐたつみの
遠鳴りを聞く淋しきこゝろ
淋しき夜わか家の棟にきらめける
星流れけり君住む村へ（碧水君に）
この夕べ故郷戀し君戀し
心碎くる春雨の窓（館中君に）
夕されば紅梅かほる山寺に
經を讀む尼の心淋しも

池の面に椿の花の散りしとき
大鯉飛びて月のぼるなり

寄宿舎の夜半　林子

山寺の鐘の音遠く消えゆきて
枕に凍る瀧の音かな

十二日の大風

雪を吹き怒濤をまきて叫びくる
日本海岸の冬風を思ふ

通信

學校近況

○昨年十二月終業式の日を以て校友會より林教諭に對し十年薫陶の恩を謝する爲青銅製花瓶一箇を贈呈せり江畑校長は會員一同を代表し仝教諭が十年一日の如く本校教育の爲に盡瘁せられしを感謝し林教諭の之に對する答辭ありて式を閉ぢたり（右は一月號に載すべき筈なりしも編者の粗漏により て誤脱せり）

○生徒學資金は先般來規定の取締もありしが今一月より特に之を勵行する事となり學資金は悉く學校長宛送金の事とし各生徒を七組に分ち七人の教員に分屬せしめ各教員は部下生徒の學資を一切保管し必要に應じて之を交付する事となりたり生徒に有り勝の濫費或は貸借等の惡弊之より一掃せらるべし

○一月廿八日午後一時より校友會例會開催十數番の演說あり主なるものは

習字の奬勵　高木先生

人格の修養　服部啓二郎君

人間の責務　坂田勘太郎君

一工匠の立志　德武國久君

大鵬と鶴鴿　征矢野餘所夫君

等にて例に比し不振なりしは惜むべし諸君の努力を祈る

○本校教諭伊藤先生は二月三日付を以て奏任待遇に昇進せられたり

寄宿舍より申上候

鉄丸記者

四十四年に入り寄宿舍を御通信申上候冬季休暇中に新年は參り申候舍前を通り申候へ其少しも新年らしくは無之候空家のた正月は治外法權なるにや門松もなければ鏡餅も無之勿論屠蘇の香もいたさず候

此月の十八日ながく鎖されありし寄宿舍も朝早くより開舍仕候すると午後には例の大食連中が續々歸舍仕り候休暇中にウンと英氣を養ひた正月には元氣を畜へ込んで參り候故舍内も今迄とは打つて變り生々として勇ましく賑やかに相成申候昔より正月はどこもかしこも餅ばかり餅なき所さびしからんと申候通り寄宿舍も今迄は誠に寂しく御座候ひしが各自脊負い込むだ餅を炙り菓子を出だして歡談し笑ひ興じて漸々どれ正月らしく賑ひを呈し申候

又舍内の疊換へと大小便所の大修繕とにより大に清潔と相成申候うれと同時に飽く迄清潔を保續する爲新に便所の掃除と廊下の掃除とを開始仕り候これ等は皆紐長の命令に依り舍生がかはる〳〵毎日掃除するものに御座候衛生上良好のみならず精神上にも利益する所多大なりと存せられ候、燻ぶつた陰鬱な寄宿舍も少しは美的生活の階段に足をかけ度きものに御座候

從來當舍に於ける種々の合圖には振鈴を專用し來り候處此度喇叭士を雇ひ入れ候て起床人員檢査登校始業及点燈の合圖には喇叭を以てする事と相成申候、曉夢を破る勇ましき喇叭の音に跳ね起きて清冽極まる冷水に洗面し寒風波る朝空に高く響く音波の下に檢査を受くる時轉た壯快の感を覺え候

二月十二日の早朝木曾を見舞へる大風雪は

當舍浴場の煙突の上部を吹き飛ばし申候

次に二月開舍以來厄病神の入舍せるには全く閉口仕候うは流行性感冒の惡魔に御座候舍生にして此厄病に冒されざるものは無之有樣實に猖獗を極め候然し只今は漸く減退仕り候間御安神被下度候、其他は別に變りは無之候先は右迄早々

同窓會第一回記事

狂夫

逢ふて別るゝは人の世の定めとは云ひ乍ら過きにし跡を尋ぬるも亦趣味あることなり去にし歳同じ學窓に集ひ集ひていと樂しく暮せし昔戀しさに得堪へで明治四十路あまり三とせも暮れて四とせの春茲に古りにし交を温めなんと白雪深く積れる木曾山路を遙々と陸奥の端筑紫の極みより來て茲に八とせの間難きに難きを加へたりにし同窓會の第一回總會は緣す深き福嶋の大手橋畔なる見晴しに於て一月七日午後の六時に開かれぬ

四方の野山は一面に六ッの花もて被はれて其北極より引きつれ來りし寒さはいよよあれに荒れて唯路走る犬の歩みの音さへも四方に響くてう寒の入りの翌日集ひ集ひし友垣は基督ならぬ母校の松田師の君の教子十二由尾の君の開會の辭に幕は開かれて此處彼處時ならぬ談話に花は咲きて室内靄々たる霞棚引きて幾世盡きぬ師弟の契も今宵はいとゞ深厚を加へぬ此打ち解けたる有樣を師の君は打眺められて頽笑みいとも嬉しげにやをら立ちあがりて一場の祝の詞を起る拍手の中に述べられぬ

斯かる樂しき宴は集ひ來りし友垣の古き交誼を呼ひ起し宴酣となるにつれ征矢野師はやをら起たれて一曲の劔舞を奏せられぬ曲は城山處は福島の城山の麓如何に緣の深かるよ木曾の流れは盡くるの秋はあるとも御岳の峯の白雪消ゆるの夏は來るとも此の樂しきの宴忘るゝの期はあらじ其の間一ッの邪心なく清き潔き斯くの如き宴をなすの期の再び來らんことを切に希望するは吾れ人共の願なれ斯くて午後十時清き會は閉ぢられぬ友垣は明日の契りを固くして袂を別ち足のまにまに散り行きぬ今日集まる人々は師の君は松田林征矢野の三師の定めなりし林師は御病にて出席せられず第一回卒業生の森君やむを得ざる事ありても第二回卒業生の中よりは坂本君長野より來られ第三回卒業生千村君は奈川の里より遙々と境峠を越へられて來られ杉木君は昨冬國民の務を果され歸省中にて直ちに出席、第四回卒業生上條君木村君長野より由尾君赤岩君は名も高き勿來の關越へて遙々と陸奥の極みより市川君は故郷の佐久より水野君、肥田君、小林君は家事多忙中にも係はらず集まられたるこゝ嬉しけれ吾れも亦など人に後れてゐならんやと木曾の深山の奥深き柴の庵を立ち出で、友の集ひに加はりぬ福嶋の里も昔とは變り果て友人の樣も昔と打變り今日集りし人々の話も今は大人びて學窓にありし昔を偲び又は逝きにし友を身を悲むなど皆思出の種とならぬはなしゆかりも深き福嶋に此の會の出で來しことの嬉しきは何に譬へんものもなしさはあれ第一回の卒業の人々や第五回後卒業の人々の姿の見えざりしことの恨めしさよ路を歩める人の靴の音にも若しや其れにはあらぬかと耳欹だてども遂に仇なりき八日の日今日は昨日の契り替へすして午前八時には松田師の邸に征矢野師を始めとして昨夜の十二人は集まりぬ明年とゝはず母校のあらん限り吾れ人共の限り斯くの如き清き集をなさんものは十二の友の口口より異口同音に出づる言の葉斯くて万事は水野小林の兩君に異議なく托しぬ會は松の綠の幾千代かけて色も變らぬ常盤こそよからんと常盤會とは名を付しぬ斯くて談は各自の苦しき樂しき嬉しき經驗談身の上談に移り時を經れども友を偲ぶの情は盡せぬものを汽車の都合ある君多かればとて茲に紀念の撮影をなし午前十一時再會を約して別れぬ此間に約しことは左の如し

毎年必ず總會開會の事

各自の御出席を勸誘する事

校友會誌上を借りて時々場所等を發表する事

記事を校友紙上を借りて發表する事

下伊那郡上郷村共有林概況

由尾忠助

會員

余が郷里に於ける模範的共有林の現況を錄して同志に報導せんとす固より不文なる小生筆盡さる所多からん幸に御添削の上貴紙の餘白を割愛されば幸なり然れども今生が記さんとするもの小生が生を享けたる村の共有に係り親しく其山に入り其谷に遊びしもの字句の誤謬は事實の正確を以て償ひ得るものある事を自信す

1、概況

地圖を擴いて其地形を達觀すれば吾信濃國は南北アルプス並に淺間山系を以て殆んど其四圍を圍繞され其間四方に連亘せる小峰丘卓は其大部を占領して其間何等平地なきが如し若しられ只此地に至らざるの士は必ずや蒭鬱數里に亘る森林の至る所に存在し木材は充分の供給から有し山形整ひ流水快かに所謂山間の美は至る所に見出だされ得るを想はん然るに事實は全く之れと反對の狀況を呈し少數の御料林を除くの外私有林はゝはすもがな最も直接の關係ある共有林

の如き兀々山骨を露し山とは云ひ得べきも森林なる名稱を附すべきもの實に僅々のみ然るに偶然(假りに偶然と云ふにも此濫伐の弊を逭れ固有の山形を保有し模範的共有林として着々歩を進めつゝあるものあり之小生が報導せんとする下伊那郡上郷村共有野底山なりとす

2、位　道

三州街道を旦々瀧川に沿ふて南下し駒ケ嶽赤石山脈の間を過ぎて足當に飯田町に入らんとする前半里四圍悉く兀々の間能く森然たる林相を其西方に認むるならん之れ即ち野底山にして正南に面し山勢頗る緩かに野底川は其間を走つて天龍に合す四時洪なく乾なくして能く上郷村一圓並に上飯田村、飯田町一部の飲料灌漑となり蕩々限りなきの惠典を之れ等民族に致す

飯田市街を離る北半里山麓一面の民家交通至便なる此地にかゝる原生的の森林を見る客年群馬縣主催共進會の際有功一等の賞牌を下附され之れを表彰せられしも又故あるかな

3、面　積

附言、未だ林業的の經營を見さるを以て從つて正確なる統計なきを遺憾とす

臺帳面積　二千五百町歩

内林業地二千四百町歩　農業地五十町歩　雜地五十町歩

林業地中未立木地四百町歩　喬林二千町歩　新植地五十町歩

4、保　護

前屢々述べたるか如く四邊森林荒廢の間に獨り能くかゝる林況を維持し得たるは實に其保護の當を得たる所以にして生か駄文を草して同志に紹介せんとする主成分は實に茲にありとす

甫め此森林の土郷村有となるや境界頗る煩雜にして到底完全なる保護の至難を知り土地悉く他町村民有林に接し他町村よりする寧ろ自村よりするよりも便多きを以て自然の數四隣の浸食は勢ひ免れさりしを以て時の局に當るもの一大英斷を以て境界整理を主眼とし土地の交換飛地の賣却等を以て目今の理想的一圓地を作れり、これと共に界線の刈除を行ひ時々數名の當局は自己の利益を度外視して境界を巡視し盗伐を防ぎ次て外敵の浸入に備へ内に於ては森林を両半する野底川を境とし東山西山に別ち而して西山を以て絶對的禁伐林となし東山を以て自由伐採林となす又東山に於ても檜花柏は絶對的に其他針葉樹も濫伐を防かんが爲め二年一ケ月位を限りとし板木(屋根板材)の伐採を許せり凡て樹木は三尺以上に切斷搬出を禁ず各人搬出は一日一回を限りとせり、爾來消極的保護の目的を實行して明治三十五年に至り一層此間の關係を明にせんが爲め保護條例を定む直接保護の爲め常時山番人一名を山林内に住居せしめ出入者の監視に任じ一方臨時山番人二名を置き必要に應じ境界並に林内を巡視せしめ保護の効を收む晩近(本村青年團)團員二百名野尾山保護の事業を起し農繁の際を除き毎日三四名宛巡視を勵行し又特置請願巡査を森林内に置き專ら盗伐犯の取締に盡す隣接悉く赤裸々たるに反し獨りかゝる林相を繼續し得たる全く局に當るものが絶對的に自己の利用をさへ制限して保護に勉めたる結果に外ならず

本山林は固より林業の法則により理想の林業を經營し來りたるものに非す故を以て適當に伐採更新の實を上ぐるに至らず不整形の擇伐作業と云ふの外なし然れ雖近々一部皆伐人工更新を行ふと共に元來の無立木地に人工更新を行ひ遂次林相の改良を行はんとしつゝあり

イ、植　樹

元來習慣的自家用燃材並に肥料用秣芝草の收集より外何等利用の道なかりしを以て未無木地は依然其形を改むるに至らざりしも明治卅年頃に至り漸く人工植樹の聲起るに及び之れに倣つて落葉松の植付をなしたる以來專ら未無木地に向つて年々植樹をなす近年縣設苗圃に於て苗木無代下付の擧あるに至り年々數萬の苗木新植の計畫を立てり土地比較的肥え至る所芝草を生ず故を以て之れを採収して肥料となすの慣例あり人家に近き所年々の新植は此目的を妨害するを以て去る四十年度より樹木の成長良好と認むる字大嶋に以て皆伐作業を初め年々十町歩十ケ年繼續のことに決定せり故を以て至る所点々良樹の成長を見るに至れり

前に述べたるが如く未た林業上の認むる適切なる作業をなすに至らざるも近々施業按の編成を見るの氣運に接す漸次多忙なるが如し

ロ、伐　採

針葉樹は絶對的に雜木は禁伐區域の外自由に伐採を許しつゝあり自家用燃材の伐採を以て本森林利用の唯一の目的にして村内住民の外一切入林を許さず各人は朝に入山し夕に下山一日一駄若くは一負の外伐採を許さゝるを以て年々の採収實に僅々にして永久に同樣の林相を保持しつゝあり然れ雖内若干の日をとし針葉樹の伐採を許し以て居民の用材の目的を充しつゝあり

6、砂　防

土砂流失を防ぐの要ある千箇に近年より赤松苗を密植せしに其結果良好にして遠からず兀地を失ふに至らん

大約前述の如き狀況に於て能く保護の實を上げ其有林の價値を發揚しつゝあり然れ雖殆んど原生に近き森林は至る所に老朽の大木多く林價從つて下落しつゝあるが如し適當なる輪伐施業の方法の一日も早く編成實施せられんことを希望するのみ